

■登場人物

松宮美緒（まつみやみお・♀・29歳）
梶本聖（かじもとひじり・♂・19歳）
岩浪真（いわなみまこと・♂・17歳）
佐東佳菜子（さとうかなこ・♀・29歳）
百瀬健太（ももせけんた・♂・28歳）

後輩女性

○美緒の職場

キーボードのタイピングの音が鳴り響いている。

美緒 「よし終わりつと。やっと帰れ……」

後輩女性が近づいてきて声をかける。

後輩 「松宮さんお疲れ様です」

美緒 「え？あ、ああ……はい」

後輩 「仕事ってもう終わりました？」

美緒 「ええまあ……何か他にやることありました？」

後輩 「ごめんなさい。そういうことじゃなくて。松宮さんって今夜って予定とかありますか？実は、派遣の子たち集めて合コンがあったんですけど、一人風邪で来られなくなっちゃって、困ってるんです。それで是非代わりお願い出来ないかなって」

美緒 「私か？」

後輩 「はい。だってほら、これまで私たち松宮さんとあまりお話ししたこともなかったし、親睦を深める意味も込めて……み
たいな。ね、行きましょう」

美緒 「あ……えと……ごめんなさい。先約があるんです」

後輩 「マジですか？そうか……まあ、今日金曜ですもんね。わかりました」

立ち去って行く後輩。後輩の声が段々小さくなっていく。

後輩 「嘘でしょ、絶対暇そうだと思うたのに。マジどうしよう」

美緒 M 「嘘……そう、私は嘘をついた。実際のところ約束なんて何一つない。ただ嫌だったのだ。彼女たちの求めるく代わり>になんて私は到底なれやしない。年齢だって趣味だって何も

かもが全然違う。そんな無駄な時間、私は過ごしたいなんて思わない」

PCの電源を落とし、コートを羽織り帰宅の準備をする美緒。そこに美緒の携帯が鳴る。

美緒 「え?……佳菜子から?」

○居酒屋・店内

喧騒が辺りを包んでいる。

佳菜子 「はいはい!じゃあお久しぶりってワケでカンパイ!!」

佳菜子、美緒、百瀬が乾杯。

美緒 「つい先週呑んだばかりじゃない」

佳菜子 「細かいことは気にしない気にしない、ねえ?」

百瀬 「え、ええ。先輩たち今でも仲いいんですね」

佳菜子 「美緒の友達なんてあたしくらいよ。ははははは」

美緒 「遅れてきてみればすっかり出来上がってるんだから……ところで佳菜子、今日のこれは一体何の会?なんで百瀬君までいるの?」

百瀬 「それはその……」

佳菜子 「可愛い大学の後輩の相談に乗ってあげたの」

美緒 「相談?」

百瀬 「いや、別にその。やめましょうよ佐東先輩」

佳菜子 「聴こえない。ねえねえ美緒、アンタ最近浮いた話とかないワケ?」

美緒 「何よ突然」

佳菜子 「いいからさ」

美緒 「金曜夜に呼びつけられてすぐ来てるんですけど」

佳菜子 「ですよー。はいはい察したよ。そもそも美緒に男とか想像出来なさすぎ。昔っから男を寄せ付けないオーラが出てるもの。ねえ百瀬君」

百瀬 「何で俺に振るんですか!??」

美緒 「オーラ……出てる?」

百瀬 「そ、そんなことは……むしろとても綺麗というか……魅力的です」

美緒 「そういうのいいって。戸村さんが聞いたらきつとヤキモチ焼くよ」

佳菜子 「出た!地雷ドカン!!」

美緒 「煩いな。何なの一体？もう佳菜子のごとは放っておこう。

それより百瀬君、戸村さんと付き合って随分経つよね。そろそろ結婚とかしないワケ？」

百瀬 「ああ……それなんですがその……」

佳菜子 「酷いっ！この鬼！悪魔！その傷を癒すためにアルコール消毒してらっつのに！」

美緒 「は？」

佳菜子 「は？じゃないわよ、察して察して、ほら」

美緒 「……もしかして……」

百瀬 「ははは。長すぎた春ってやつですかね。実はフラれちゃったんです。つい先月」

美緒 「あ……そ、そうなんだ……なんかごめん」

佳菜子 「そこですよ！この私がキューピッドになってあげようってことからのこの呑み会なワケ。面倒なの嫌いだからズバっと単刀直入しちゃうわよ。美緒！アンタ百瀬君と付き合っちゃえ！」

美緒 「はあ！？」

百瀬 「あああ！！す、スミマセン！俺が悪いんです！俺が昔、松宮先輩のご好きだったって話をしちゃったからその……」

佳菜子 「確か美緒も蟹座だったよね。ええと、スマホの占いによりますと今日は奇跡的な出逢いが期待出来る一日だって。凄くない？良かったじゃん！ほら奇跡なう！」

美緒 「勝手に話進めないでよ」

百瀬 「そ、そうですよ。松宮先輩だって困って……」

佳菜子 「大丈夫大丈夫、面倒見のいい美緒なら十分に戸村さんの代わりになってくれるから」

美緒 「佳菜子……」

佳菜子 「ねえ美緒？」

突然席を立つ美緒。

佳菜子 「ビックリした！」

百瀬 「スミマセン！」

美緒 「ううん、謝るのはこっちだよ。ごめんね百瀬君。私じゃ戸村さんの代わりにはなれないよ。ほら、オバさんだしね」

佳菜子 「帰っちゃうの？ねえ、ひよっとして怒った？怒った？」

美緒 「怒った。だから今日は佳菜子の奢りね」

佳菜子 「じゃあさ怒らせついでにもう一つ言ってもいいよね？いつまで引きずるつもりな

の？」

美緒 「は？」

佳菜子 「昔話してくれたよね。高校の時のカレだっけ？ずっと忘れられないってさ。ねえ、いつまでその人のこと引きずってるワケ？もう10年以上も前の話でしょ？」

美緒 「違っよ、12年前。じゃあ私帰るから」

美緒、その場を立ち去る。

○電車内

電車の走行音が響いている。

美緒 M 「別に引きずってなんかいない。ただ……あの時の感覚を恋と言うのなら、私はその感覚を失ってしまったってだけなんだ。突然終わった恋。だけどいつかその続きが始まるんじゃないかなんて、そんな馬鹿げた想像を捨てきれずにいる。ただそれだけなんだ。……つて……三十路前だつてのに私は何考えてるんだろう。そもそも佳菜子だつて私のこと心配してくれているから……まあやり方は無茶苦茶ではあるけれど……でも心配してくれている。それくらい分かっている。なのに私ときたら……」

美緒 「え？駅通り過ぎ……しまった……これ止まらないやつだ」

電車の扉の開く音。降車する乗客たち。

美緒 M 「あんなことばかり考えていたからなのか。電車に乗り間違えてしまった私が連れてこられた駅。そこは奇しくも通っていた高校のある駅。そう、彼との思い出がつまったその駅だった」

美緒 「懐かしい……随分来てなかったな。終電まで……まだ大丈夫だよ」

美緒、改札を出る。

美緒 M 「何が私をそうさせたのだろう。ムシヤクシヤしてたから？それとも……呼ばれたようなそんな気がしたから？気が付けば私は駅の外に立っていた。そう、あの時の思い出をなぞるように、このかつて見知っていた街に歩を進め始めていた」

○駅から少し離れた住宅街

一人歩く美緒の足音だけが鳴り響く。

美緒 M 「駅から少し離れた住宅街。坂ばかりの街並み。坂を上った先、おおよそ山の上とも言っても過言ではないその頂きには街のシンボルともいえる大きな病院。そしてさらに上を見上げるとそこには……」

美緒 「星……そうか、東京でもこれくらい西だと結構綺麗に見えるんだ」

美緒 M 「視線をふと前方に戻す。私は視界に入ったその場所に驚き、ハッと息を飲む。そう、それは私にとっては星空なんかよりもずっとずっと美しいものに映っていた」

美緒 「あの公園……まだあるんだ」

美緒 M 「曲がり角の公園。そう、彼の好きだった場所。いつも二人で過ごした場所。沢山の思い出の詰まった場所。あの時の思い出がたちまちの内に溢れ出るのを、私は抑えることができなかった」

美緒 「真君……」

○公園近くの通り（回想）

二人で歩く真と美緒。静かな住宅街に響く二人の足音。

美緒 「うふう寒いね」

真 「そりや冬だし」

美緒 「そんな中散々待ったんですけど」

真 「だよな。悪い悪い」

美緒 「謝罪に誠意を感じません。本当に悪いと思ってるなら……」

真 「あの桜の絵を寄越せ」

美緒 「分かっちゃった？」

真 「単純だもん、お前。でもいくら頼まれても無理」

美緒 「真君のあの絵大好きなんだけどな。……それにさ、サクラサクって合格祈願も込めて……ダメ？」

真 「ダメ。そもそもお前は絵なくても大丈夫だよ。頭いいし元氣だし。それにさ……ごめん、ちよっとアレだけはやっぱ無理なんだ」

美緒 「そうか。でも今日なんであんな遅かったの？先生に捕まってたとか？」

真 「それ。マジ面倒だよな」

美緒 「進路調査票ちゃんと出さないからだよ。真君は美大行くんだよね」

真 「どうして？」

美緒 「前から言ってたでしょ。ねえどこにするの？出来れば地方はやめてよね。なかなか会えなくなっちゃうし」

真 「大学とかさ、そんな先の話まだよく分からないって」

美緒 「先じゃないよ。私たちもう高2だよ」

真 「でも俺は今が大切な。美緒とこうしている今がずっと」

美緒 「ちよ、な、なに恥ずかしいこと言ってるワケ!？」

真 「そうか?なあ、それより腹減らない?」

美緒 「まあ、少し」

真 「じゃあラーメン食べに行こうぜ。待たせた詫びに奢ってやるよ。美味い店があるんだ。美緒もきつと好きだって。その公園曲がったところなんだ」

美緒 「え?待って!」

駆けだす真。

○現在・公園近くの通り

一人歩く美緒。

美緒 「あの時食べたラーメン……美味しかったな。今でもあるのかな、あのお店」

速足になる美緒。

美緒 M 「あの時の味が恋しくなって私は少し足早になる。そう、その公園を曲がって……そう考えながら公園に差し掛かった、その時だった」

美緒の歩が止まる。

美緒 「え?……ま、真……君?」

美緒 M 「思わず彼の名前が口から零れだす。そう……公園のベンチに腰掛けた人影。その姿はまさしくあの時の彼だった」

人影に近寄る美緒。

美緒 M 「きつと幻を見ているだけだ……そう思いながらも私は自分の歩を止めることが出来なかった。一步一步、ベンチの彼に近づく。こちらの気配に気づいたのか彼が立ち上がる。私は緊張の体が強張り動けなくなる」

歩が止まる美緒。

美緒 M 「そして彼が……こちらを振り返る」

聖 「あ……すみません、別に怪しいものじゃ……」

美緒 「嘘……」

美緒 M 「その困ったような笑顔……それはまさに私が誰よりも愛した笑顔と瓜二つだった。目も鼻も口も耳も眉も全てが一致した。違う点があるとすれば、目の前にいる彼の方が少し大人びている点と……」

聖 「あの……もしもし？」

美緒 「声が違う」

聖 「え？」

美緒 「あ……その、何でもないです」

聖 「ごめんなさい。夜中の公園でボーッとしてたら変質者か何かだと思われちゃいますよね。でも僕違うんです。ちよつとスケッチに来てただけで」

美緒 「スケッチ？」

聖 「はい。でもこの公園って電灯とかないんですね。無理でした。ははははは。あの、お姉さんは？さっき声がどうこうつて……」

美緒 「ごめんなさい。知人によく似てたから……」

聖 「そう……なんですね。本当ごめんなさい、疑われるようなことしちゃつて。じゃあ僕、もう帰りますから……」

美緒 「待って！！」

駆けだす聖。しかしすぐに歩を止める。

聖 「……はい？」

美緒 「好き……ですか？」

聖 「え？」

美緒 「ラーメン……好きですか？」

聖 「……はい」

○ラーメン屋・店内

ラーメンを嚼る音。美緒、息を吹きかけてラーメンを冷ます。

聖 「へえ」

美緒 「な……何？」

聖 「女の人がラーメン食べてるとこ初めて見ました」

美緒 「は？」

聖 「あとこんな美味しいラーメンも初めてです。そもそもラーメン屋さんって入るの初めてかも」

美緒 「そう……なんだ。ねえ君……学生さん？」

聖 「はい」

美緒 「いくつ？」

聖 「19です」

美緒 「(ボソッと) だよね、29じゃないよね」

美緒、再びラーメンを冷まし始める。

聖 「猫舌なんですか？」

美緒 「うん。ごめんね食べるの遅くて」

聖 「いいです。その間ずっと見てますから」

美緒 「え！？……や、やめてよ」

美緒 M 「この子は一体何を言っているんだ。そんな、ずっと見てるだなんて、私は恥ずかしさにも似た妙な感情で気が動転してしまった。そして、一刻も早くこのラーメンをたいらげてしまわなければならない、無理をしてスープに口をつける……」

美緒、慌てて食べようと食器をガチャガチャする。

美緒 「あちっ！」

美緒 M 「熱さのあまりスープをこぼしてしまう。恥ずかしい、こんな姿も隣にいる彼にじっと見られてしまったのか……そう後悔しながら、必死になって卓上の紙ナプキンを探す」

聖 「服、汚れてないですか」

美緒 M 「私の視線の先にそっと差し出されるハンカチ」

聖 「大丈夫ですか？口、汚れてますよ」

美緒 M 「そう言うとハンカチで私の口元を拭う彼」

美緒 「あ、有難う。は、はははは、ごめん、なんか格好悪いね、年上なのにこんな……」

聖 「年とか関係ないですよ。僕が慌てさせちゃったのが悪いんですし」

美緒 「う……うん。有難う」

美緒 M 「真君に瓜二つの彼は、また困ったような笑顔を浮かべてみせる。私は彼に拭われた口元をそっとなぞる」

聖 「あの……食べながらいいいで、一つ聞いてもらっていいですか。大切な話なんです」

美緒 「え？な、何？急にどうしたの？」

聖 「その……もっと早く言うべきだったんですけど、僕……」

美緒 「う、うん……」

聖 「実は……今お金持ってません」

美緒 「は？……なんだそんなこと。別にいいって。誘ったの私だし。私が払……」

聖 「ダメです。それじゃ何ていうか……援交みたいじゃないですか」

美緒 「ど、どどどういうこと？」

聖 「だって、お金払わせちゃって、それでデートみたいになって

「ううか」

美緒 「あのね、別に私デートなんて……」

聖 「とにかくラーメンのお金は絶対払います。だから……またあの公園に来て貰えませんか」

美緒 「え？」

聖 「その、家近いんですけど、家にも多分今はお金ないっていうか……だからその……また来てほしいんです」

美緒 「あの公園に？」

聖 「はい！……って、図々しいですよねなんか」

美緒 「ううん、そんなことない。わかった、また来る」

聖 「本当ですか！？」

美緒 「だってお金貰わないと私が援交させたことになっちゃうんですよ」

聖 「はい。……そうだ、そしたら連絡先を……電話番号と……

あの、SNSとかやってます？」

美緒 「まあ、一応」

聖 「じゃあID教えますね」

紙ナプキンにIDを書きはじめる聖。

美緒 「H・I・J・I……」

聖 「ひじりです。僕、梶本聖って言います。あの……えと、…

…お姉さんは……」

美緒 「わ、私？……松宮……松宮美緒」

聖 「美緒……さん……いい名前ですね」

美緒 「私の名前を繰り返す彼の表情は今日一番の笑顔だった……

気がした。ううん、少なくとも私の目にはそう映った。真君

とそっくりのその笑顔を見て私は……」

○翌日・美緒の自宅

一人黙々とPCを操作する美緒

美緒 M 「パソコンを開き、SNSで彼のIDを検索したのは翌朝のことだった。帰ってすぐには出来なかった。だって……怖かったから。ひよつとしたらこれは全て幻だったんじゃないか。私が真君を思うあまりに生み出した虚構だったんじゃないかなんて、そんな不安が拭いきれなくて」

い。だから彼は幻なんかじゃない。本当に……」

ENTERキーを押す美緒。

美緒 「……いた」

美緒 M 「そこには昨日見たのと同じ、少し困ったような笑顔を浮かべた聖君の写真。それと沢山の美しい風景の写真」

美緒 「写真好きなのかな？」

美緒 M 「プロフィール欄を詳しくみて、彼が好きなのは写真ではなく風景なんだと分かった。そこにはこう書いてあった」

美緒 「梶本聖……19歳。都内の美大に通っています……美大」

美緒 M 「驚いた。まさかそんなところまで真君にそっくりだなんて。しかも専攻は水彩。それも風景画が得意だと書いてある」

美緒 「同じ……同じだ。真君と……あれ？そういえば昨日も言っていた。スケッチしに来たって……でも……なんであの公園なんかでスケッチを？」

○翌日・公園

ベンチに腰掛けている美緒と聖

聖 「なんであって……桜の樹を描きたかったです」

美緒 M 「SNSを見た後で私はすぐに連絡をとった。そしてその翌日、私はさっそく彼に会いに行った。そう、約束したこの公園まで」

聖 「この公園の桜……綺麗だなんて思いません？」

美緒 「でも今、冬だよ。花咲いてないし」

聖 「はい。ですから咲いたらもっと綺麗なんですよ」

美緒 「うん。知ってる。凄く綺麗なんだよ」

美緒 M 「そう、この公園の桜の樹は私にとっても特別だった。だって真君が絵に描いていたから。そして、私はその絵が大好きだったから。いくら欲しいとねだっても決してくれはしなかったけれど」

聖 「あの……美緒さんのSNS見ました」

美緒 「ああ……うん、有難う」

聖 「何も書いてないんですね」

美緒 「いきなりそれ？」

聖 「別に悪いって言ってるわけじゃなくて」

美緒 「……まあ事実だし。ごめんね、読んでも面白くなくて。でも書くことも特になくて」

聖 「じゃあその……つくりましょうよ！」

美緒 「つくる？」

聖 「はい！書くこと、これから増やしに行きませんか？」

美緒 「そんな、増やすって急に言ったって……どうやって」

聖 「僕と一緒に」

美緒 「聖君と？」

聖 「はい！その、任せて下さい。多分大丈夫ですよ。この街だつて駅前まで行けば結構色々あるんです。デパートとかもあります。美味しいお店も多分あると思いますし、遊べる場所だつてきつと」

美緒 「詳しいの？」

聖 「少しは。昔、色々話聞かせてもらったし」

美緒 「聞かせてもらった？」

聖 「いや、それは……とにかく、色々あると思います。そして色々書くことだつて見つかるっていうか……」

美緒 「うん。そうだね。聖君の言う通りかも。私知ってるから。

色々……ううん、全部あるつて、この街には全部」

スマホのカメラのシャッター音が何度もする。

美緒 M 「彼に促されるままに私たちは駅前までやってきた。そして二人で色んなものを見て回った。デパートでウインドウショッピングをした。二人してファーストフードを食べた。ゲームセンターでクレイニングゲームもした。それに大きな本屋さんで立ち読みだつてして。まるで高校生みたいな……ううん、高校生。完全に高校生のデートそのもの。だつて、行くところ全部が……」

○公園

ベンチに腰掛けている美緒と聖

美緒 「結局この公園に戻ってきちゃったね」

聖 「あの……どうでしたか？SNSに書くこと……増えましたか？」

美緒 「うん。増えた。だつて……楽しかったから」

聖 「本当ですか？」

美緒 「なんかね、すごく懐かしい気持ちになれた」

聖 「え？」

美緒 「この街案外変わってなくて……私が高校生の時と」

聖 「はい」

美緒 「それに聖君が連れてってくれるところがね……」

涙ぐむ美緒。

聖 「美緒さん？」

美緒 「ううん、なんでもない。聖君がつれてってくれるところがさ、まるつきりあの時と一緒にっていうかね……」

聖 「あの時ってどの時ですか」

美緒 「ごめんね、こっちの話。そうだ、ラーメン代まだ貰ってなかったね。このままじゃ援交のままだよ」

聖 「……ですね。待って下さい」

聖、財布を開き千円札を取り出す。

聖 「……はい」

美緒 「千円札？おつり……350円だよ。参ったな、細かいのあったかな」

美緒、財布を取り出し小銭をまさぐる。

美緒 「ごめん、ないや。ちょっと待ってて、ジュース買って崩してくるから」

聖 「おつりいいです」

美緒 「え？」

聖 「おつり……いららないです」

美緒 「でも……」

聖 「そうじゃなくって、今はいらなくて意味です。今度……また今度返して下さい。だってほら、そうじゃないと、今度は僕が援交してるみたいだし」

美緒 「何それ……」

聖 「ダメですか！美緒さん……」

美緒 「ダメ……なんかじゃない。分かった。じゃあおつりは今度返すね」

聖 「はい！絶対……約束ですよ」

聖が駆け去る。

美緒 「(微笑みながら) 350円の援交って……どれだけ安いわけよ、私」

美緒 M 「これが始まり。そう、こうして私たちは週末ごとにこの公園で待ち合わせをするようになった。会う度に駅前に出て高校生みたいなデートをして。いつもいつも同じことの繰り返し。だけどそれは私にとっていつしか日常となっていた。かけがえのない、一番大切な日常に」

○居酒屋・店内

喧騒が辺りを包んでいる。

佳菜子 「はいはいはい！じゃあいきますよ！メリー……クリスマス
っ！！」

乾杯をする佳菜子と美緒。

美緒 「クリスマスまでまだ二週間もあるよ」

佳菜子 「細かいことは気にしない。じゃあほら、女二人の忘年会っ
てことでいいからさ」

美緒 「今日は一人なんだ」

佳菜子 「なに？この前のことまだ根に持ってるわけ？」

美緒 「何その言い方。佳菜子の凶々しさも大概だよ」

佳菜子 「よく言われる。サンキュ」

美緒 「褒めてないからね」

佳菜子 「でも久しぶりに私と呑みたかったでしょ？」

美緒 「別に」

佳菜子 「酷い！私は美緒と呑みたかったのに！！」

美緒 「ってことは何かあったの？」

佳菜子 「ご名答、聞きたい？」

美緒 「聞きたくない」

佳菜子 「と言いつつ本当は親友の相談に乗りたくてウズウズしてる
んですよ」

美緒 「はいはい、もうそれでいいから。どうしたの？」

佳菜子 「百瀬君の話でちよつとね。っていうかそもそも美緒のせい
なんだからね！」

美緒 「意味が分からない」

佳菜子 「アンタがあんなフリかたするもんだからさ、今度はアイツ

私に色目使ってきやがったのよ」

美緒 「百瀬君が？意外」

佳菜子 「そりや可愛い後輩だけど男として見られるかっていったら
……もう勘弁してえっていうかさ。もう美緒と一緒に。あたし
じゃ戸村ちゃんの代わりににはなれないだろっつうさ。正反対
でしょ、私とあの子」

美緒 「まあね。じゃあ今日はそれをどう断るか相談に乗ってくれ
っってこと？」

佳菜子 「それが違うんだな。ほらほら、耳をすましてごらんなさい
よ。聴こえるでしょ、シャンシャンシャンシャンとジングル

ベルが。そうクリスマスは二人ジングルベルを聞いて過ごすものなの！なのにこのままじゃ私は一人シングルベルを聞くクリスマスを迎えることに……そうなるくらいなら妥協もやむなしかなって思ったりさ」

美緒 「え？だって好きじゃないんでしょ百瀬君のこと」

佳菜子 「でも一人で過ごす29歳のクリスマスなんでもっと嫌。ねえ！どうしたらいいと思う！？」

美緒 「え？いや……私にはちよつと……」

佳菜子 「何よ何よ、友達甲斐がない女なんだから。いいですよいいですよ。どうせ美緒は私に内緒でいい人作ってるって知ってますから」

美緒 「え？いやいや、ないないないない」

佳菜子 「ダウト！！これが動かぬ証拠だ！！」

美緒 「これ……私のSNS？」

佳菜子 「ここ一ヶ月くらいなんかやたらと楽しそうじゃない？」

美緒 「それは……これまで全然書いてなかったからいけないなと思ってる」

佳菜子 「そしてここ！ほら見切れてる！男が見切れているわけでごさんすよ！！」

美緒 「あ」

佳菜子 「あ。……じゃないわよ。もう、そういうのあるなら報告してよ。親友でしょ」

美緒 「いや、だから本当にそういうのじゃなくて」

佳菜子 「う、ううううう。うえおうおおううう！！」

美緒 「どうしたの？気持ち悪い？」

佳菜子 「違いわよ！泣いてるんでしょ！嬉しくて嬉しくて仕方ないのよ！！」

美緒 「え？」

佳菜子 「高校時代の彼のことずーっと忘れられなくて、恋が出来なかった美緒がさ。やっとだよ、やっとその彼の代わりになるいい人に出逢えたってのが私は嬉しいんだよ」

美緒 「彼の代わり……」

佳菜子 「そうだよ。昔の恋に代わる新しい恋。美緒やっと出来たんだよ」

美緒 「新しい恋……真君の代わりに……聖君……」

美緒 M 「私は……何を今更驚いているんだろう。本当はずっと前から……ううん、初めてあった時から気づいていた筈なんだ。」

私が聖君と一緒にいると楽しい理由。それは……聖君の中に彼を……真君をダブらせているからだ。そう、まるで、突然終わってしまったあの日の続きを二人で歩んでいるみたいな、そんな錯覚を私は楽しんでたんだ。でもそれって……そんなのって……私は……」

佳菜子 「美緒？美緒おお！！」

美緒 「え？」

佳菜子 「どうしたの？」

美緒 「な、なんでもない……なんでも……」

美緒 M 「私はまた嘘をついた。なんでもなくなてない。ずっと目を背けて来た現実。一度視界に入ってしまったそれは、いくら忘れようとしたって決して思うようにはいかないものだった。二人で過ごす時間が楽しければ楽しい程、また会えるのが待ち遠しければ待ち遠しい程、彼のことを思えば思う程……これまでとは違った想いが私のなかで絶えず湧き上がり続けて……私はやがてそれに耐えきれなくなってしまった。だから私は……」

○公園

ベンチに座る聖。そこに美緒がやってくる。

美緒 M 「その日も同じだった。彼は一人公園のベンチに座って、にこやかに桜の樹を眺めながら、私を待っていてくれて……」

聖 「美緒さん。どうしたの、遅かったね」

美緒 「ごめんね。電車が……遅れてた」

聖 「そうなんだ。ねえ……ひよっとして何かあった？目元真っ赤だよ」

美緒 「二日酔いのせいかな」

聖 「そんなに飲んだの？ダメだよ飲みすぎたら」

美緒 「ごめん」

聖 「でも少し羨ましいかも。僕も美緒さんと一緒にお酒飲んでみたいな」

美緒 「……ダメだよ」

聖 「怖い顔しないでよ。冗談だよ。一応19だしね。お酒は来年になってから。その代わり誕生日になったらどこかに飲みに行こうよ」

美緒 「だからそれもダメ」

聖 「なんで？だって来年にはハタチだよ」

美緒 「来年はね……ないんだよ私たち」

泣き出す美緒。

聖 「美緒……さん……ごめん、僕何か美緒さんを怒らせちゃった？それとも困らせた？教えて、そしたら僕……」

美緒 「それがダメなの。ねえ何で？何で聖君は私なんかそんな優しくするの」

聖 「だってそれは……」

美緒 「それもだよ。その困る仕草。なんで似てるの？目も鼻も口も耳も眉も……声以外全部似てる。だからね……だから私、甘えてたんだよ。10歳も年下の聖君に。ごめん……本当にごめんね」

聖 「なんで謝るの……それに年なんて関係……」

美緒 「あのね。聖君に話しておきたいことがあるの。大切な話。聞いてくれる？」

聖 「……聴きたくないかも」

美緒 「お願い聴いて。私の好きな人のことを話すから」

聖 「え？」

美緒 「これは私の初恋の話。その人はね転校生だったの。私の通っていた高校は丁度この街にあってね。彼は高1の夏にこの街に引っ越してきたの」

聖 「……うん」

美緒 「私も彼も美術部だった。でも私は友達に頼まれて数合わせで入った名前だけの美術部員。だけど彼は違ったんだ。中学の時から色んなコンクールで沢山賞を貰って、その絵はね、私みたいな素人も魅了されるっていうか……私は彼の絵が大好きだった」

聖 「美緒さんも絵、好きなんだね」

美緒 「うん。でも私は絵以上にそれを描いている彼を好きになっってしまったの。絵とは正反対にとっても子供っぽくてね……聖君と一緒」

聖 「僕そんなに子供っぽいんだ……そうか」

美緒 「私の彼への想いはいつの間にか抑えきれなくなっていて、気が付いたら口から思いが零れ落ちてた。好きですって……生まれて今までたった一回だけの告白。彼……聖君みたいな困った笑顔浮かべながら……僕もですなんて。一番嬉しかっ

た」

聖 「付き合ったんだ」

美緒 「そう。それからの一年は本当に楽しかった。週末ごとに駅前デートして……でもね、それは2年生の冬に突然終わってしまったの。そう、終業式の日だから丁度クリスマスだった。この公園のこのベンチで二人話して……きつと明日から楽しい冬休みになるって思ってた。でも、彼はこの街から消えてしまった」

聖 「……うん」

美緒 「後になって分かったのは。彼は転校しちゃったってこと。クラスの誰にも告げないで突然いなくなっちゃったって。どこに行ったのか教えて欲しいって先生に必死になって訴えたけど、本人の希望で伝えないで欲しいって」

聖 「……うん」

美緒 「でもね、私が毎日毎日必死に食い下がるものだから、最後には先生が折れて、これだけ教えてくれたの。彼が元々この街に引っ越してきたのはご家族がこの街の大きな病院に長期入院するからだって。でもその病院でも手に負えなくなってしまうって……だからもつと大きな病院のあるところに行くことになったんだって」

聖 「その後美緒さんはどうしたの」

美緒 「彼を待つことにした。だって彼の家の表札はそのままだったから。だから家族の病気が治ればきつとその家に戻ってくるって思ってた。だけど卒業する頃になってその家の辺り一帯取り壊されてマンションになった。私は……どうすればいいか分からなくなった。恋の仕方も分からなくなった……一ヶ月前までは」

聖 「え？それって……」

美緒 「聖君に初めて会った時本当に驚いたんだから。彼に瓜二つな君が……彼との思い出の詰まったこの公園にいて……気が付いたらね……私は君を好きになっていた」

聖 「よかった。だったら……」

美緒 「でもそれは違うの。私……本当悪い女だよ。私は聖君を彼の代わりにしてるの。私が好きなのはきつと聖君じゃなくて……あんまりに失礼なことだよこれは。でも一緒にいるとどうしてもそう思っちゃうから。だから私ね……サヨナラしよ

うと思って……」

聖 「僕はそれでいいよ。失礼なんかじゃないよ……僕は代わりでいいんだ」

美緒 「ダメ」

聖 「ダメじゃないよ！僕と一緒にいて楽しくなかった？僕は美緒さんと一緒にいると本当に楽しかった。もし美緒さんも僕と同じ気持ちなら……僕はそれが一番嬉しい。だからその為なら、いくらでも僕に真さんを重ねてくれていいから。だからサヨナラなんて……」

美緒 「ごめん……ごめんね聖君」

美緒が走り去る。

美緒 M 「最後に見た聖君の顔には涙が浮かんでいた。これ以上彼といたら私まで涙がとまらなくなる。辛くて辛くてきつと立つてすらいられなくなる。そう思ったから私は逃げるように走り去った。駅前の喧騒とジングルベルが耳に届きはじめる頃、私の肌を冷たい水が何滴も刺し始めた」

○駅前

辺りにはクリスマスらしい喧騒が聴こえる。雨が降っている。

美緒 「雨……聖君傘持って……」

美緒 M 「ダメだ。まだ彼のことを考えている。全てを忘れなければいけない。そう思い携帯電話から彼の番号を消去しようとする。しかし走り続けた疲れと冷たい雨が体を冷やしたせいなのか、上手く操作が出来ない」

美緒 「もう、なんで……指が……え!？」

美緒 M 「間違って開いてしまった電話帳。それは12年前から変わらず保存している彼の……真君の電話番号だった」

美緒 「何やってるんだろう私……もう繋がらない電話番号なのにいつまでも……」

美緒 M 「岩浪真……その名前をじっと見つめているとふと妙な違和感を感じた。真君……真……そうだどうして気づかなかったんだろう……その違和感の原因は……」

美緒 「聖君……最後に私に真さんの代わりになるって……でも私、真君の名前なんて一度も出さなかった。なのに……」

駆けだす美緒。

美緒 M 「私は……再びあの公園に向かって走り始めていた。降りしきる雨がいつしか雪になっているのを肌で感じながら」

○公園のベンチ

聖がベンチに腰掛けてスケッチをしている。
そこに美緒が駆けてやってくる。

美緒 「はあ、はあ、はあ」

聖 「美緒さん……どうしたの一体？」

美緒 「聖君こそ……なんでまだここに」

聖 「待ってた……美緒さんのこと」

美緒 「どうしてそんな……」

聖 「高校時代の美緒さんの真似」

美緒 「馬鹿……風邪ひくよ」

聖 「でもさ、やっぱり待った甲斐があったなって思うんだ。こうしてまた美緒さんに逢えたし……それに二人でこんな綺麗な桜を見ることも出来たし」

美緒 「桜……」

聖 「ほら、見てよ」

美緒 M 「聖君が指さす方向を見る。そこにはあの桜の樹。柔らかな新雪が枝のあちらこちらにフワリと積もっていてまるで……」

聖 「真つ白な花が咲いているみたい……でしょ？」

美緒 「本当」

聖 「昔住んでた家に大きな桜の樹があったんだ。とつても綺麗な花を咲かせる樹でね、僕はその樹が大好きだった」

美緒 「聖君？」

聖 「でも、ある日を境に僕らはその家を離れなくちゃいけなくなつた。僕のせいだ」

美緒 「ねえ、聖君？」

聖 「またあんな綺麗な桜の花が見たい。僕がそう駄々をこねていたら、ある朝枕元に桜の絵が飾ってあったんだ。そう、僕の為に兄さんが描いてくれた絵が」

美緒 「兄さんって……やっぱり……やっぱり聖君」

聖 「うん。あの日初めて美緒さんに会った時ね、僕もとっても驚いたんだよ。入院しているときにずっと兄さんが話してくれていた女の子にそっくりな人が目の前にいるって」

美緒 「女の子って……私29だよ」

聖 「同じだよ。兄さんが見せてくれた写真と変わらない」

美緒 「聖君……」

聖 「真兄さんのことずっと黙っててごめんなさい」

美緒 「聞いていい？でも真君と聖君じゃ苗字が……」

聖 「両親が離婚したんだ。それも僕のせい。この街の病院で手に負えないって分かった後で、家がゴタゴタしちゃってね。結局別れて父さんだけがこの街に残った。母さんと兄さんは僕の入院費を捻出する為に一生懸命働いてくれて」

美緒 「真君も？」

聖 「そう。美大行くのも諦めて働きに出てくれて……」

美緒 「教えて。真君は今どこで何してるの」

聖 「ごめんなさい」

美緒 「どういうこと……それ」

聖 「僕のせいなんだ。幾つも仕事掛け持ちしてくれてたから……疲れがたたって……途中で事故を起こして……」

美緒 「……嘘」

聖 「ごめんなさい。本当にごめんなさい。美緒さんから兄さんを奪ったのは僕なんだよ。それだけじゃない。僕は兄さんから夢を奪った命を奪った……美緒さんを奪った。だから……僕は少しでも兄さんの想いを遂げたいって、兄さんのお陰で退院出来たから。だから兄さんの為に、兄さんの代わりになることを望んでずっと生きてきたんだ」

美緒 「真君の代わり？」

聖 「うん。ずっとそう思ってきた。今日までずっと。でもね……ごめんなさい。今は少しだけ違うんだ。最初は兄さんの言う通り素敵な人だなんて、兄さんの想いをなぞるようにそう思っていたけれど、でも今は僕自身が思ってるんだ、誰よりもずっと、その……美緒さんのことを……」

美緒 「……馬鹿」

聖 「ごめんなさい」

美緒 「違う」

聖 「え？」

美緒 「そこは違う。真君は馬鹿って言われて謝ったりしない」

聖 「じゃあどうすれば……」

美緒 「どうもしなくていい。聖君は聖君のままでもいいの。だって……おかしいよね。二人は全然違うんだって分かっているのにさ……どうしてだろう、私、聖君のこと……」

聖 「美緒さん？」

美緒 「ねえ、スケッチ。早く描いてよ」

聖 「スケッチを？」

美緒 「そう。真君は結局私に桜の絵をくれなかった。だから聖君がプレゼントして、桜の絵」

聖 「この桜？」

美緒 「そう、今日こうして二人で見たこの白い桜の絵。それを私にちょうだい」

聖 「クリスマスプレゼント……なのかな」

美緒 「そうだね。そうかもしれない」

美緒 M 「スケッチブックに鉛筆を走らせる彼。先程まで舞い降りていた白い雪はいつのまにか姿を消していた」

聖 「やんじやったね。……あ」

美緒 M 「彼が気づくのと同時に雲間から美しい陽光が降り注ぐ。その光は白い桜の花をさらに輝かせる。私が今までにみたことのない程に美しく煌びやかに」

美緒 「綺麗……」

聖 「忘れないようにしないと。溶ける前に、これ全部スケッチするから」

美緒 「うん」

美緒 M 「一心不乱にスケッチを続ける彼。それを見つめていてふと私は気が付いた。何故だか彼といると笑顔がこぼれてしまうんだって」

微笑む美緒。微笑み返す聖。

【終】

※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての変更などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) までメールで報告頂きますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間内で集まっでの練習でのご利用。

- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキヤスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。

- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumbal227@hotmail.com (岩本)